**早稲田大学文学研究科フランス語フランス文学コース主催**

**連続講演会「シュルレアリスム、100年後に」第3回**

**小説と批評への問いかけ**

**日時　　2024年10月12日（土）　14：00～17：30**

**場所　　早稲田大学戸山キャンパス36号館5階582教室**

鈴木大悟（中央大学准教授）

 クルヴェルを読むクルヴェル

―文芸批評としての『ディドロのクラヴサン』？―

永井敦子（上智大学教授）

グラックとブルトン

―『アルゴールの城にて』の何が二人を結びつけたのか

アンドレ・ブルトンが『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』を発表し、シュルレアリスムが運動として出発してから今年で100年。我々は今この運動について何を知っていて、何を語るべきなのか、連続講演会の形で考えます。

第3回は1930年代の小説と批評を取り上げます。ルネ・クルヴェル研究という未踏の沃野を独走する鈴木氏が、作家自身による自著の読書ノートをも駆使しつつ、理論的エッセー『ディドロのクラヴサン』を文芸批評という視点から再考し、日本におけるジュリアン・グラック研究を一貫してリードしてきた永井氏は、この作家の静謐なる処女作を、ブルトンがそこに見たものを探りつつ、時代のなかで読み解きます。現実との対峙を強く迫られた30年代のシュルレアリスムにとって、作家や思想家を、ときには自分自身を読むことの意味とは何だったのか、今あらためて問い直す！

お問合せ先：salut@list.waseda.jp（早稲田大学文学部フランス語フランス文学コース）